

偏見と差別をなくするために

「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(アイヌ文化振興法)が1997(平成9)年に制定され、これにより1899(明治32)年以来100年近く続いた「北海道旧土人保護法」が廃止されました。

狩猟や漁労のアイヌ民族に有無を言わず農耕化するために農地を与えたり、日本語を強制的に使用させるなどの同化政策から「北海道旧土人保護法」は差別的な法律と非難されたりもしました。しかし、これらの状況を改善するために、アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図ることなどを目的に、「アイヌ文化振興法」が制定されるとともに、ここにきてようやく固有の民族として法的に位置付けられました。

また、この法律に基づき、アイヌ文化の振興等の事業を全国的な見地から統一的、総合的に行うため、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(アイヌ文化振興財団)が設立され、研究や出版物作成の助成、アイヌ語講座のラジオ放送、アイヌ文化フェスティバルの開催、アイヌ文化交流センターの運営などの文化振興事業を展開しています。

今日、十分な文化の保存や伝承が図られているとは決して言い難い状況にあるアイヌの人々に対して、これら法律の趣旨を踏まえ、民族としての誇りが尊重される社会の実現を図るための一層の取り組みがこれからも不可欠となっています。



人権の世紀をめざして

このシリーズで述べてきたほかにも、現在の我が国には、マイノリティー(少数者)への人権に関する問題が存在しています。例えば、ハンセン病患者やHIV感染者、犯罪被害者、医療被害者、刑を終えて出所した人、同性愛者をはじめとする性的マイノリティー等をめぐる問題です。

こうした、マイノリティーへの差別は、同質性を重視し、「みんなと同じでない人々」「みんなと同じでない文化」を自分たちから遠ざけようとする慣習や社会意識から生まれており、当事者に対する社会の偏見や無理解の中で我慢と忍耐を強いています。

人権が何よりも優先される社会を築くためには、問題をマイノリティー自身に求めるのではなく、多様なニーズに答えられるよう社会のいろいろな制度やしきみを見直し、一人ひとりが正しい理解と認識の深まりをめざして、学習や啓発の機会を増やすことが必要です。

あなたの知らないところに
いろいろな人生がある
あなたの人生が
かげがえのないように
あなたの知らない人生も
また かげがえない
人を愛するということだ
知らない人生を知ることだ

出典「ひとりぼっちの動物園」あかね書房
灰谷 健次郎

人権が大切にされる社会への第一歩は、「知る」ことです。知ろうと行動をおこすことです。そのため伊予市では、市民の皆様には様々な人権に関する問題をテーマとして、学習の場を提供し、多くの方の参加を得ています。皆様の参加をお待ちしています。

ご意見・お問い合わせは

教育委員会 社会教育課 982-1111(内線726・727)まで

同和教育シリーズ No.11

しあわせ

～マイノリティーの人権問題～

ー アイヌ民族を中心に ー



カット 伊予中学校教諭 長尾 美津子

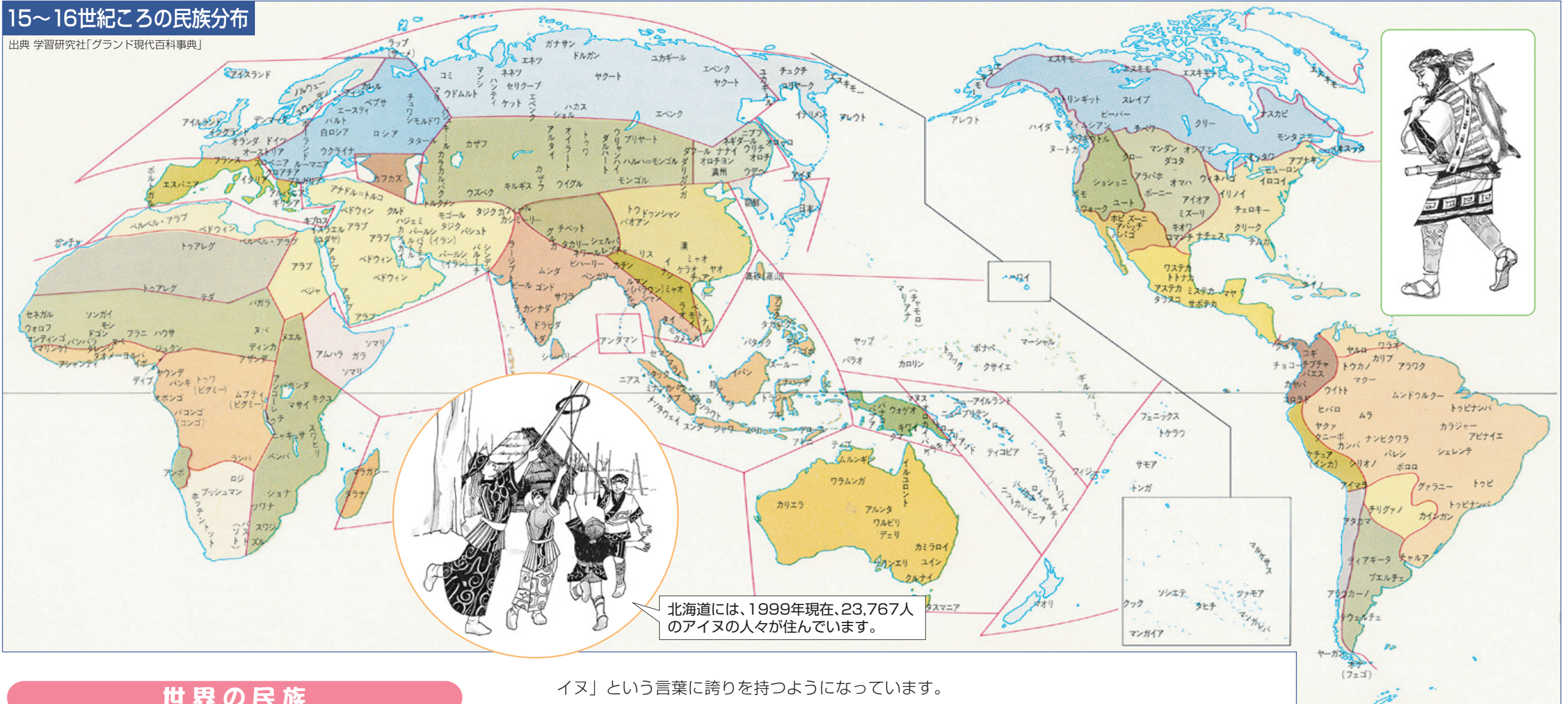
2003年12月 発行

伊 予 市 教 育 委 員 会

愛媛県人権教育協議会伊予市支部

15～16世紀ころの民族分布

出典 学習研究社「グランド現代百科事典」



世界の民族

世界には、いろいろな民族がいます。民族とは、独自の伝統文化や独立の言語を発達させ、「われわれ」という同族意識で結ばれた集団のことです。地球上には、現在2,000以上の民族が存在すると考えられています。世界の国の中にはいくつもの民族が共存している国もあります。互いに支え合いながら共存している場合にはよいのですが、少数民族だからといって差別されるというのは許されることではありません。では、日本について考えてみましょう。

アイヌ民族への差別は、今

「アイヌ」という言葉は、アイヌ語でカムイ(神)に対する「人間」という意味で、民族の呼称でもあります。しかし、この言葉が正しく理解されず、侮蔑の意味を込めて使われたこともあり、アイヌ語で「同朋」という意味の「ウタリ」という言葉が多く使われてきました。最近になってアイヌの人々は、再び「ア

イヌ」という言葉に誇りを持つようになっていきます。

北海道に住むアイヌの人々に「何らかの差別を受けたことがありますか」の質問に対して、「差別を受けたことがある」と答えた人が12.4%、「自分自身ではなく、他の人が差別を受けたのを知っている」と答えた人が15.7%にもなっています。差別を受けた場面としては、「学校で」が46.3%と最も多く、ついで「結婚のことで」が25.4%、「職場で」が9.5%となっています。このように、アイヌの人々に対する知識や理解が十分でないことによる偏見や差別があり、結婚差別や就職差別などが今も存在しています。

アイヌの人々の文化から学ぶ

18世紀以降のアイヌの人々の文化は和人(日本人)によって絵画に描かれています。しかし、そこに描かれているのは、当時の和人が、異民族、異文化を眺めイメージしたアイヌ民族像でした。そのまなざしは、好奇心や偏見で満ちたものでした。

しかし、その文化は現在の考え方にも通じる素晴らしいもの

だったのです。アイヌの人々は、自然現象は神そのものであり、動物・植物は神が仮装して人間世界に存在していると考えました。神々は身近な存在であり、そのなかに人間も住まわせてもらっていると考えました。そのため、アイヌの人々は、自然物を奪い尽くしたり、採り尽くしたりするという発想を持たなかったと言われていました。

このようにアイヌの人々が自然と共に生きるなかで創り上げてきた豊かな思想文化は、今日の環境問題の解決の考え方ともつながります。現在、アイヌ文化を守り伝えていこうとする運動が続けられています。

わたしたちは今、このすばらしい「アイヌ文化」から学ぼうとする姿勢が必要となってきました。

(出典「人権教育推進の手引」愛媛県教育委員会)